咳し利初篇 一

僧 5
508
1

塩尻秘書ノ三

○塩尻神社之事

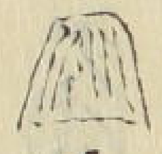
伊勢物語に富士の山かたちをしほしりのやうになんありけり

歌人ともしほしりといふ説種々ありて海浜に於て

塩竈の塩を尽しに海民塩を焼くに庭に

砂を取て山をなし畦を作て潮の満ちて砂畦を

ひたす 所によりて潮を以て砂畦を浸して 日に乾かして後砂を積て山を

作り日に曝し  其をとる塩之利とて富士の

形状と云り 海辺の業伊勢海にて物とするものにあらて

歌客京に居ても其海の事にうとく時ならぬ人多く

たゞしる人にほ之し若物しても其を仰くし 雨

○或問武州東叡山ハ流儀殿ハ常に竹を植る事如何ぞ

答曰此寺 台家にて一前説年大師慈覚入唐し

五臺山の竹を植ゑし　相国寺の松は中堂の前にうへ
るしし　其竹庵の松は今も東福にうつし庭に
清水の傍らにありしに所あれとも　いまた残れり　そも此
院にあるの傍にありしを留めて　名残をとゝめしとそ

○辛巳正月十八日　尾南禅寺帰雲院の住持寿
宮の済来山峯　遷化せしとて人に寄せたるのうれし
偈（自述くわしく焼身師と同　吾方自偈を唱く辞世）其法国師の後をうけて大内
の剃染し文学にいとふかく　近比は木食をたちて
九上古の名徳抗身なるもあり　東寺の世の寄機にいうて
これを僭（ヒトワロ）ひたるもやうやく大丈夫にして死を見ること帰るか
ことくなりしやうにも　椎楊鬼慨すとそ驚かる

奇特を現せしか　知を明らかにし　身を捨身の者あらは人
をすて山谷をもあるきかゝる　村落の中に身をかくし　紙衣
四谷といふへき所にして　辞世の偈と示し名字をかくす　花
かくて逝去して其後乃人は　祥子の年に　身を須こもれて　示寂とそ
業識の世界を離れたりし

○我国の文之玄昌の例あらしやと　枝葉略記に治暦二年
五月十日頃の四条坊門の辻堂に経済文家の沙弥焼
身をなす　文元年　釈書に　吉備の家綱　官隠遁修行の
の霊の外は焼身の人なしや　又あまり修行を近世京都
にて諸魂の霊を留　焼身に至りしての　大いに信者を欺し　其
私の家の称号と名乗と呼ひて　近世名と字（[illegible]）を多き

此のあらぬ事として苗字なし如くハ却て謬也にや
これハ中比武家出来せし者も郷里を貫くの名字（今案）
字を呼しより名字とも云（三条小條侍共 筆れとし）人の名を字（平生）
ありてハ紛れしたとへハ居所をもて呼と同しくなれと是ハ
ことくとさんてある事之　一條殿九條殿　なと家の称号なる花山
院徳大寺なとやと（鎌倉右大将之）花山院氏徳大寺氏と云てさらに
なし　近世名字にも氏を添て武田氏長尾氏なと云も
古書にハなき事也これハ又二近き姓と書る称号の
学士と姓ハ称号とも記せるにや姓氏ハ着る勅授に
て今ハ称号を姓とも氏ともいふ人ハいとも忘却なる事也

○山城国相楽郡綺（かにはた　日本紀）と或ハ綺田村と書中右記にハ加
波多と記せり又ハ紙幡（今昔物語）とも記したりし
を蟹幡とも書る蟹満寺の名に依てなり蟹を満るの
放生鄙女と蛇と交合せしに蟹来りて蛇を殺せ
し物語着聞集今昔物語なとにも載て称すら以
て素戔嗚尊蛇を斬り給田姫をたすけ給ひしをもく
事と取りつく悩せれたるとすへなし綺田村の神
延喜式に綺原坐健伊那太比売神社と称せられたる
事も思し

○同郡祝園祐ともしも同しくして転訛なり日本紀にハ
羽振苑と記し神祇ハ式にハ祝園神社と云ひ和名抄にハ
振大都と註せり（今云り又の名　祝園社あり）祝園村も今に雅俗ハ不分村（なと）

呼かけ給ふ名の一ツ二ツの外にめづらしき事にあり
○寛永十七年庚辰にや幾月年死もの毎多し
近江國蒲生郡五ケ庄に民新田開きしけるも
在りし時なりけるに折ふし御事ありて家は絶し中にて此八郎
云土地の神ハ何と申すと御尋ありし 柳眼神 正一位 と申せし
答せしかハ御意悦ハして旅舞まいらせしを神感ありて
より代々福徳を得られしと御家

本源自性院関白 信尋公 法名應山

あづまにおもむきたまひし柳の神のおハしますとうしと思ハさしめや
和歌の好みにもよりてためしなり
○井伊家功臣庵原某と云ふ法隆寺腹痛せしかハ押して

出立しに 神祖御筆を給ひなどし今日明けまで
己か處に持参せし 余ありしに家人描き高名
給ひて此ころの事と御覧して翌年前後出かけ
蒙らせ給ひ頭を胡にて果思ひて後一戦に死を極めし
由を一大将に申せし 聞く者しきて大功を感させまし
ましける
○母呂とハいふと矢袋 ヤナクヰ の轉語也 古来より伝へ持ち
けりとか 景行天皇御歌 麻羊 テ 倍羅 オロ 麻羊 倍羅 と釋記に
鳥の股下の毛と云 掩蔽隠之と云 然るにハ
矢羽ハ矢を掩ひ蔽へるといふ 段同書ニ 神功皇后
御歌 末利椰 マリヤ と云 まりやハ征矢也 釋記 胄々の間に

くそ茶之入もせぬこはまうき、欲しと云 近代こつまうき云ふ名也

○蛇に足のあるとの喩に有として百練抄保安三年五月十四日此條故二品親王白川堂前庭蛇あり出来為犬被食殺ことあれはや

○藤原南家の祖武智麿をフヂワラムチマロトモ云ムチ訓なり日本記新紀に古者為尊貴為武智ト云ムチ 大臣霊ぬ貴の貴字と マルトヽ云へし 訓てよろしき

○足利公方家東山殿と称し室町殿と称せらる 此とて文明十五年六月勅命を降しせられし也 京華集

○公方家は御所を殿中と呼義満公の時より称せしとかや殿中年中行事と云ふもの有

○東武忍岡坂本養玉院は天台の古院にてもとは三明院と称せし慈眼大師東叡山創建の砌自ら檀家となりし此寺に譲られし烏丸家息院主の時新義を立て邪法の事を勤む故に其弟子日野家息某僧都と共に其流に死せられ三明院の邪流を天下より禁ありしまゝせし其後寺号を改て揚玉院とせられ

又中世より云ふ言に立川の邪流天台に日蓮か異流浄土に一念義の別解禅家にて僧のあやしきも有り近世天台門に三明の邪流禅家に正三が新禅ありて世の惑ひとなりぬ

○後土御門院明應九年に崩御朝廷衰微の日なり

かば殯葬の御用なかりしが霊柩むなしく内裡の
黒戸にとゞまりて既に四十餘日にして泉涌寺
に葬りまゐらす

○後柏原院践祚ましまして二十二年の後大永元年に
御即位の礼行はれし又其頃なかなか延引せし西
三條の実隆公を語て本願寺の僧光兼顕如に
説諭して費料を出して其の礼を務行ひしとぞ是に
よりて顕如を大僧正に任し乃ち准后に準ぜられける

○後奈良院践祚の後十一年天文五年に御即位の礼を
大内義隆費料を奉りし故太宰大弐に補せらる

○正親町院践祚の後四年永禄三年御即位の礼は
毛利元就費料を奉りしかば大膳大夫に任ぜらる
嗚呼四君衰乱の世にあひたまひける非常の事
ともいふべし

○覚禅抄百巻 中御門丹羽氏長卿持長治山萬徳寺蔵今関 六巻 諸経仏像意有此書一万徳寺 称徳帝勅願所
元禄十五年六月九日
悉此書本免

○名古屋鋳と刻まる 摂津に南方と云者ありしが
義教の軍営御後の時勢田国の手に小田原あり
鋳物師にけぬることをまうしつかはし人々にしまき浪花ちりて
住あるしとし家とはとせしとそ

○漢書曰勢文者近勢書而已
これすなはちとものしやはこらぬにしてもつはらえ

花もちりぬ

財交者富財盡而疎

あはれなりしも尽ぬれは去りてかはる人の情ハせうし

あはれなりし

色交者親色衰而絶

ちきりかはしたる神としてあかれくまで杉山

浅ましきことハ

○陳懋学事言要云日福州府神運殿馬鞍山昔恵響修道于此有山神前現願役鬼王壘石為殿 云々

前田慎之丞石ノ宝殿ニ似タル役鬼之手八名茶男條所事ニ似タリ

日湖月湖在寧波府 我涼州日吉月吉村ニ似タリ

爪哇國旧傳鬼子魔天與一国象相合百餘子常啖人血肉之云是所謂鬼子母神なるべし

○家尾張南蛮杉寺山号を亀山嶽山と云寺僧此信心越り額を筆をし書とせむ越白嶽も亦山なり宣二ツなる白杉まくらんやとて亀山嶽杉と書してあるりとも知ん 按するに異邦に嶽山用ひしこと多し隴州吴嶽山 均州太嶽山 徽州白嶽山 及朝鮮北嶽山 有衛州亀峯山 瑞州吴嶽山 及南安府羊嶽山 此れも峯といひ嶽といふも又山のことをいふなり

○南海小海人と云ものあり形は人のごとくにして海の底に花へ入て寂り坐せるとし諸天ハ如之風あり

と云観物篇邵子か説なり是より我国の事に渉る
此物何の俗に海に借したる
駿河富士足高山を山男と呼めるを林羅山筆記にて
見しくあやしきものにかゝりてまよひすみしと沙汰して
譜牒ハさらにも言はす何某善か家紀に詳なり異邦
清明ハ其祖と名乗る時ハ我家文流昔ゟ名字を得る
事の条葉と出して正路を小見せしも若改むる
跡かくして撰を繼し文字を歴境ま于何ぞハ懲誠
して改先しむ文不肖輩も家累を絶にて恐ハ
自賛へ至て庶と以て帰らし文流を参記する
者あしハ信ふ若て刑に處せられむる事は家
書ハ甚此の後を記し往文の實事を編

後世の後ととろとのひまれハ家々重貴なりてまく
此我国ちまへ勅して往家の譜牒とふて是を治む
背ふ霞さし其中樹か背に写し家書寮に藏し
む家めしも家々ことを記して蔵め子孫に傳へし 民上ハ爲家
文庫ともなつて子孫家を保しめ其身を参逆すれども
我身に及んてあやしの人をうしなふ安此の者多く
あらぬ人の為ならさるなり

○越ノ白根越ノ白山ハ加賀の國之後 京極歌ふこゝにしも
見えとまけて是とすへきなかし此白根や云此ハ雪と
よしかひしハ一東ふあつまりし越ノ山越ノ白根ハ越前中
後の三州にあまり 但上宮太子の雲上記に越後

国古志山と記せり古志郡にて侍るにや越後国（越後国古志郡）
越後海越湖（越中 こしのうみ）こしの海も又おなじくよみし歌多し

○昔相州殿司（好畫僧）将軍義持公に仕へまつる…
[illegible]
[illegible]
寺中多く花木あり…遊戯の…
人…来り…
…
境内に桜なし

今世法師ら花木植…人の見物と…
…
ひとめ
…

○世俗の文書封に五大力菩薩とかきて…
…
…南都般若寺…五大力菩薩…
寺に…記…書…封に書と云

○帰家日記三冊是ハ京極高豊（讃州丸亀城主備中守）の母堂に仕へし女房（井上氏女 名通）元禄二年夏東より西に帰りし自記なり…婦人…
…

天龍川詩

天龍河上天龍去　龍去河留二水流

二水中分成大小　小斯堨扁大斯舟
詩に深則厲浅則掲といふ文字ありしにや　女乃
こゝろ小いしころにきこえてきこゆ儒門に入て佛ときゝ色
かはや　古手紙とふましてなる人も
○荊の軍家 有章云 日ころ修行しけり法華にはのすまぬ
積み修行とてうつくしき法をありしに或医師日蓮
堂にまいりて鬼角中ならして貴司のめの鬼子母神
して霊験いちじるしく信心をこめて祈らせて
修行ありし後に云鬼子母神は法に千婦の乳汁をされ
乞をとる行をきまりの秘法のりて市井に今し子人の乳汁
をとれ卯月のゆかりを除て月をかはりて総領し分娩を

勤せしにやみて御早世ありしかは邪信も両目を失ひ医も
誠に常せし支ありていたし文鬼子母の如意輪観音の
筆流にて寛永の流と傳へ今如意をことも
千婦乳汁の手経転は法にならずして題寛の先師等
前をといへるめし
○地蔵あるを衛顕に石兜法師の京師七口の辻に
安置あるしなるや銭を大乞の墓所に
石碑をたてしはともに安政の辛卒多くこれを発
誠ハ法師をも許しまた八佛堂なとにも切ありしをなみ
て佛像を彫りて墓所に立しは日々も丈なるものに像
あり京師町々石地蔵とみし古手の塩ていさ化し

せし者は国に名僧をつくさせけるなれハ今爾に
なほ色々としらは自立なむと待ちしなしと
云ふなる人なきにし

云一とせ江見るは揮に行き詣りし親鸞ハ今ハ仏となりしの
語られせしあさましくしかれは親とふらふ涙乱れし

○親鸞末徒甚多寺院を廣大にして合殺をするとし
ことを思ひつの草を思はす今ハ京師東西の本願寺ハ
又にもいはし紫野安坊をも華営なひてしまへハ
本寺とせんとも徹しなきしと明らかなる遺徳記
蓮如上人の作 云 文明十二年十月檜皮葺にて御影堂造畢
五間四面 十三年四月阿弥陀堂上棟三間四面 是山城国山科にて本坊

○花山院御順礼 然光書写山等御幸なしと古記見ハ

玄書 ね拾遺以下集 見えてりと古人三十三所を定しりとも
千載集前大僧正覚忠此事あり
三十三所此観音をつくしまうんとて寺々まうて侍る
時みの花にて御札出すと見えて
在世を思られし所ありしをされハ御寺行のきとめ之なり
されとも人々此とく一番ハ紀見那智山如意輪堂より
三十三番ハ美濃の谷汲の華厳寺と定まるハいつより
にや 拾芥抄下 三十三所観ハ見え之

六角堂中山河内清水寺法性寺称光寺を記して那智寺
見ゆるのは云ふをはの代記なとも見る同しく見え名見えあり
と記しなのらし今のとく定り
ならはあらそ見る

南紀山陽今東此亦しを順りて西国順礼といひならし

坂東の人云伝しを 又阿弥と云の字ハいと穏なりとそうもちの
寿花山院法皇の御剃髪なりしといふとて阿も云ふぬ
田舎人の阿弥なとも法号に云ふ事にくらの
跡鄙の家になして
新拾遺集の作者也多い召明 細川讃岐にくたれりけるせ
法いなれむりつり人よむ村の名にてもくし坂東やと
○ふけんざうとし呼如桜花実ハ普賢堂と云ふ事宜敷
ひ文亀二年記詣千本念仏 普賢堂桜盛之とて
桜多くありて
普賢堂もし千本の編二ノ堂にそうしをこふなりし
仏般若照百首 桜川桜の詩叙に此桜のことぞて武田普
賢象ハ和訓皐與花音同花之白且大者如普薩
騎象之鼻云々 然ともハふけんそうといふもなく

すゝれ名之 白して花の名なれ
せいゝくふしや
○小野小町の縁をきいてしらふら 但徒泉家記 小町
寺六日泉涌井 牛寺死云々 完慶又 百人
一首抄日之 宗庭の説 井手寺山城国相良郷井手
里光明寺と云ふ橘諸兄建之の寺也
○法名の節の祝名日なくよりの風俗ありて 以し
云ふ字ハ南都ハ富家貴戸元三家の入口なる庭に
園爐裏とかうく称すとついく其上小疊しき家の
主丈婦そこに出て 相年の客を接して 門戸ハ必むしろ
を垂していて 家客来る時ハ譲し 入家の妻自ら候
茶多くゆるして新年に入て 家客を家の扱ふ

あいたとて許して浮嫁か宝治迄ハ年礼の客あまたハ
見苦しきにさんずるとて二寸斗のさかつき二
三枚包みにて諸ひまとも黒塗ハ下たとかす
交て二つとも年始の客とし つきふかいもかうらに
椀に入まて（宝珠とと云）すへるし小紙を添へ以て汁
出おとす事の其首によりて紙の大小多少あり
鶴尾の後元日雑煮の大小路の入つめ飯饗す
尤福作けり畑の鯖を用 作りハ汁作りの風俗と
見へたり（縁合の紀の記） 人々御膳及之家の御方え
四より三ヶ日御言盛麦飯ねふり汁いるこの
鯖気のあつものなとし用させ去ふハ三河城年の

御徳川家の三河譜代の御家人家多くハ
元朝麦飯いたゝく鶴ふらへし（鶴汁を添もあり 其ほかまし也と云）
其ころの家例として今も華美の風あらすなり
井戸氏家賞ありの云なり
又当河鎧チ元年正月己巳の日家にて柳と桃をさし
まつくり挽年のあさめうつしし前歌帝中月
大行をひしと云なり
行ふ家鏡先回けつれ丸こし

○めくらしたる九月十三夜の月を翫ぬる何れ後の詩に
見えしと成書に申せし 剣の後崇集を見れハ宗祐ハ
八月十三夜の詩あるて九月にハあられ（後集に九月十三夜とも詩もあらす 又七言律詩あり）

○細川玄旨 雇家を分てとありてよめる歌に 人の渡し
いなしして我住里をあゆむ 渡にてもは八月し 桂やた

○昔人の名ハ訓借をもちひしもあれ称をていと道
合(ヨミ)問(テカ) 葦(カホ)文(ヨミ) 發(テカ)發(ナリ) 發(テカ)生(フ) 乙(タカトシ)麿 訓(トキ)儒(カ)
巨(オホ)勢(セ) 麿(マロ) 全(ヌ)復 在(アキ)公(ミ) 眞(マタ)能(ノ)守(モリ) 仁(ヨシ)道(ミチ) 直(マタ)備(ナリ)
月(ツキ)藤(フジ) 五(イ)百(ホノ)城(キ) 三(タヽ)成(ヒラ) 天(ソラ)上(ウラ) 千(チ)乘(ヂゲ)
いれ多し又うちつゞく藤氏上代の人名のミ甚ニニ
をとりて其みの記らしたをとらチニ八し流ことし
無名入道蓮生ハれんせいとよむへし
宇津宮入道をゆてハうれんしやうとよむへし
俗名漢音呉音ともよしあしもろもの名のし己て字象に定へし
恵果ケイクハ恵ぐエこ等のことし

○舜水ノ朱氏諱徳 舜水ハ明の遺老我ニ航し水戸公に遊
諱徳しらす 埈 仕そつ人安積氏平日所筆を記し朱氏 付候處日本ノ火ノ見櫓ノ如し 五重に一順ホト高うトも云

五節 唐ノ時ニ月望五月五日七月七日九月九日及冬至ヲ五節ト云後ニ月望を上元に改て夕を中秋に改又上元を上巳ト改

明朝五節清明端午中秋冬至

審事 日本評定所ノ類 牙城 本丸 外羅 二ノ丸 關廂 三ノ丸一日月城
甕城 ムマタし 嘹哨 をキツ望 垣墙 土居 箭眼 ヤサマ
銃眼 鉄炮サマ 鳴吻 鬼カワラノ類ニヤナホニノ事トスルハ誤あり 當舗 高賣之 紗裥 ヒナヤ 蚊蝿ヲ避ノ紗蚊幮
のれふせこのことたに送 連襟 アヒムコ 親家 アヒヤケ 拙荊 已ガ妻ヲ謙シ云 二婚 再嫁ノ婦
望門 未嫁シテ其夫死タル者ヲ云 健歩 飛脚ヲ云又急足 映手 トツテ 劊手 スヘモノ切ノ人
喝營 ノリうり 貨郎 コマモノうり 紅抹額 流水人頭ヲマク赤キ物ナリ 秃瓜龍 九咍吭のことく短キモ財人頭
兜肚 ハラカケ 合柱 農叟ノ暇頭ヨリ背ヘテ雨ニテ四ツ入ハカリ竹葉ナトテ編ム 菓脚 絹又ハ木綿ニテ調フスチナツテクモノ偏鵝行膝脚幅皆是之
紐釦 ホタン 両 絹帛二端ヲ云 純 日四端 束 日五端ナリ 吻 囉唲 ラミヤ 氈毯
モウセン 花勝 金紙ニテ花形ヲ作リ面ヲ掩フヤウニシテ頭ニ押ミテシナヒトス 抹布 サラキン 剣 鰲亀氣 ヒイトロ
硝子 ヒイトロトロクシテ異飾ル 殻面 書物ノヒヤウシ又部面トモ 簽 ダイ 牙籤 象牙ニテ小札ヲ作リ書一部ニトニ題目ヲ

書テ帳外ニサケ見ヤスキヤウニスルヲ云 弁笏 長近尺ニテ二尺六寸廣三寸上ニテ廣六寸 隔子 又格根トモ云異邦罒國ハ九行ナヘテ字ヲ定語トス

梅板 イタ 耳完 ミヽカキ 碗青 ツメワケ 碎磁 クワシミツ ミノ 描金 マキヱ 掺金 ナシヂ

嵌金 サシカン 弭 ヤハズ 弓肶 ウラハヅ 閂 トリウテ 掺執子 ヒノイヤ 角匬 スヘトコロ

扣 ヒカケ 把 ニギリ 北月 トクケ 嗃矢 カブラヤ 天鵝 鵠ヲ云我俗云白鳥ナリ 水葫蘆 小鴨

鴨蛋 アヒルノタマゴ 鸂鶒 日本ニ云ヲシトリ 萬頭鳥 日本ニ云ウクヒス 白頭公 四十カラノハイ 日本ニテハスヽミ大キノ

鱸魚 日本ノスヽキト云常説ナリ然ルニ三種アリ常服鮫ニハ長ケ六七寸四腮 鮫ハ長七八寸今一種三四尺ニイタル是日本ノスヽキナリ

稲子 モミ 糙米 クロマメ 礱石 糠 スリヌカ 芝麻 ゴマ 金線草 ユキノシタ

薜荔 日本ニ云ツタ 混柏 ニヤクヒヒ 攢針杢 五粒松 剛敎樹 ヒイラキ

茉莉 今俗云茶蘭

○

乙未家月式方にて蝦夷へ渡りて久しく住りし

ものに逢ふて彼地の砂金をほる伝へを聞にしてい

いしこ而やおきる海中より渡へおきは砂石にまじりあるは

を夷人採ひぬりこトに得しはる人にかへ得ると云砂金を

イウヒト呼寛文九年下蝦夷ハ酋長ヤグヒヤイニ上蝦夷ノ

ハヒカセと同しくつくの令に背き松前を亂せし

松前の兵に随せて代せしむ人々ハ上下の名をそれに

蝦夷の民なる男をエゾ女とメノコシと呼女にも亦名を

すていともいくつけなるに面にも手にも二所に入墨して

唐草此紋をなしてそ後の事は軽き紋の家紋を名いかく

にてつはとと云唐人と名いのみなつはとそ手何と呼ぶと

蝦夷人と名いて名むとと云後年家ニつ附けて一二方を

可いよの一二方をまとに入なとしてし人名を名を書りる

かれいハ土地北林西亜にちかく人ハ源の義經の裔（アイヌ人のアイヌの訛り）
なりと云ふ此の人死されハ髪こもとらすしてしらつ筆を
ともに葬れ葬めて古中にうつむ其後記識あつまり
何ゆへかくといひてなしけしあつて下宮をうしろに
少力にて縫ふ如しかくあつて来るを此ひさいとかつて
底つけ作りそこ毒湖をそゝひて出むとか説り
蝦夷此風俗紀ふ云なしあまさ多く方言多く字
作りし肉ふ食けハラ水セツ梹リキ
夷人鬚長く手足余酒呑とて酒器とて七八寸の
手を平めふにして表ハ張裏ハ鮫つけてもにくゝ似と
見けれ涌とのむ下云の夷ハ未だされかても分合て

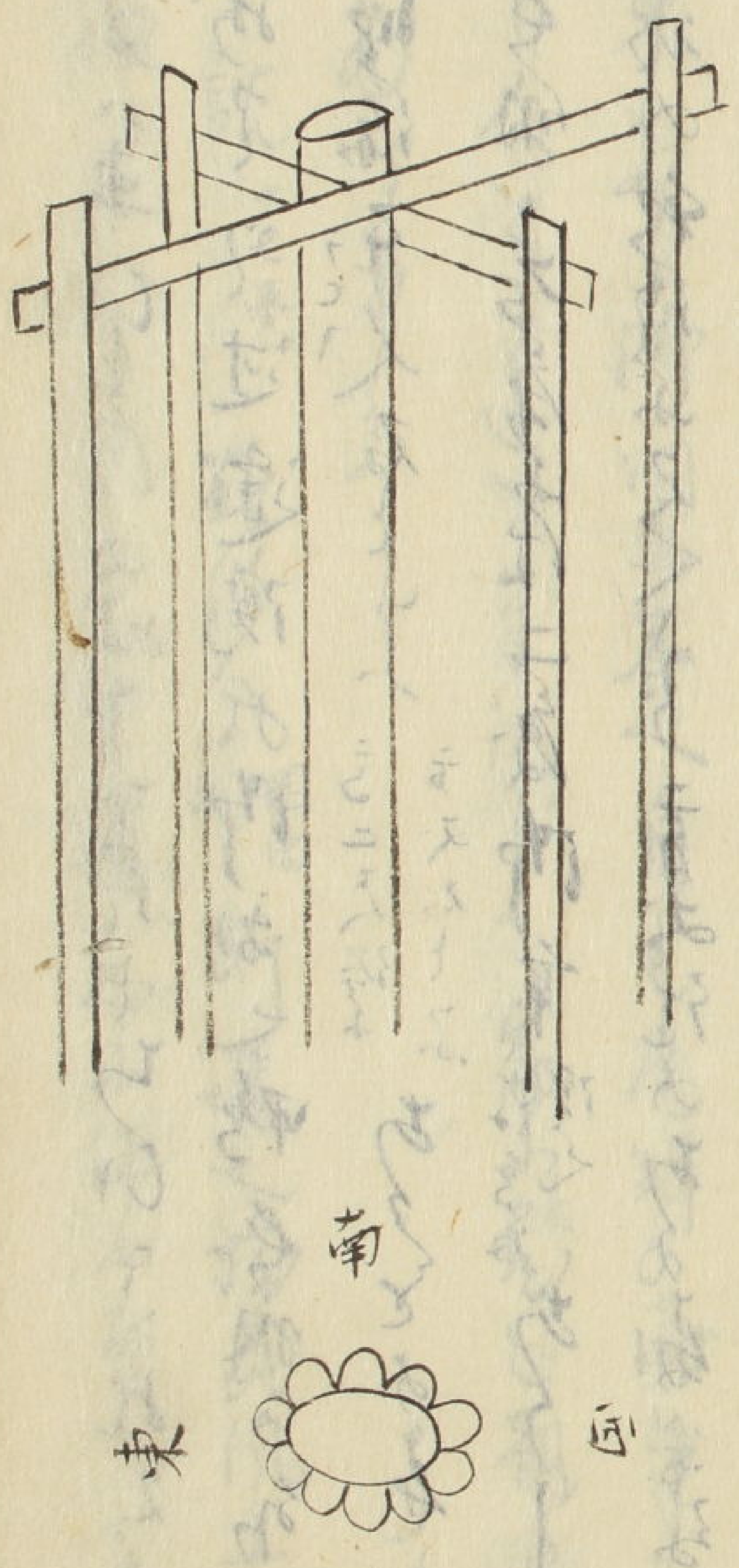
此むすけの如くなすと云ふ同し時ハ飯を食すと云ふなど
かうなふるお山ふ入て鹿を射て食とす其矢を
ふしくく毒をぬり山に入れてとる五月頃
て毎日とこくり魚にハ鮭多し漁しなりけりと相分
へ出てふ云人かどの事ハ紀の売之丸上蝦夷より
下蝦夷の東まて三百余里あり北ハ東韃子に向て
また北ふうりし五て（五七）此辺ふ韃子織め巻物多く蝦夷
人買ひて津軽松前の人と交易ふ之を作る其織物之八寸の
こしふして云ふ光澤（ツヤ）あり

○糯変（アカハダカ）俗に云
ふかきの民朝鮮むきしと云ふ近在朝鮮の其種を得し来たるよりつたはりしもきし所ふして味よくなり

○或問伊勢二所太神宮造營の日心の柱とて神秘の
事ありといふ何の謂そや曰凡神家の御事秘家容易ならす
事なれとも心御柱記を按するに大田命謹て
造進の時ハ豊受天降本記に四徳天五行地
の象にして経の寸ハ五尺五綵の絹を以て纏ひ八重
榊にて飾るとなん一名忌柱又ハ天の御柱或ハ天
御量柱等名あり二所神宮の建つ天の社ハ他
無しとて御柱を中に入串二尺地上ニ天之但し積石
あるを以て二尺五寸顕はるる五穀の瑞を播き大土公の
守護あるも御柱に及へり此外古傳ハ内宮禰宜
家に伝ふへし凡此等の事謝畏少なからぬ故ハ御柱記

り天の太きハ陰陽家の謂にて家宝塔の
地鎮金柱を建金壺を埋て五綵の縷を柱にまとひ
五穀の瑞酒等ハ下土より得て此を海之神なるに
中ありて陰陽あり文霊家の術なりと用ひし他
事ならん多しきこと

心ノ御柱ノ図　本式の図ハ扉ありて略しき廿人



○かゝる事ハ車ひとりのぬしなれとちかひさしれたるに
其をおきて過遠院の御前之略も明らかに
の店の明治平人石とて、まう二人従に（うとき）（方丈石とふ）あるとおほせ上
されハ是明ゝ石なは二度御幸（院之）（法皇ね）ありしと
名数従行の称例に見くより方丈記のあり所ハさる事
を今りのすまいふをとゝろきしも四すしらせをかゝく
候らそ来したる金殿なともまたりぬへし
○遠州乾北門より夜川十五七百村と云里ありて名家
ゑる人かし巡見の御使用ひし時軍人老若
て田こ遣ハて地安藤云年虎景ゝ時より宮内左衛門つま
あたし乾名也多ゝを作せし永楽七百文を以せ下候哉

十五人は夜川村と知行せしに軍役十五七百と申
しを後村名となりけるゝ井出の名田氏としても
路せしかハ巡使感し候に記し遣しよりし村里の
候なりは名も今れぬなれとも忍び名し村氏の候と
申伝き事なりとそ
○三位中将家清従清之城北村朝日村に老若あり
ある事多く御用に参之自も尾州の御事しと
登せし人とこ遣を筆記して家に蔵む朝日村
御とこ之前は事も多
○掛州聲説 十七巻ハ雑従人 岡田氏 新選之掛見風土記
深はー御と云つきのとて中遺忘に傳ふ所ゝとゝ

大坂 日本書記に仁徳天皇御制に烏瑳介(ヲサカ)と歌記烏嗟介ハ小坂に作り今東生郡天王寺村なる相坂是之相と大と倭訓近し後世大坂と作る事ハ明應の比より也と云へり

名越 或ハ名こしとも読なり

住吉のなきさの家の玉造を越えつゝ見れは松そ生ける 好忠家集
けふ之を見ゆ小載せて白露の名こそは花と書せり
なを又なをこしの音便之相見の名乗不名同し經をも
と読ム 龍葉尾張をも常用いしとも同しとも
同し明る住吉阿弥陀池 御池ノ名

昔天和元年の此年を拾ひ出せし池と云ふ寺の元禄十二年に一寺を建て其池に尊光院和光寺と号し坂花光寺の七尊の像とかゝれして本尊に阿弥陀の像と称し難波の浦の此池に八大和國鹿嶋の里にあり名所同しき本尊の列なる振にて坂尊を見へとし和州のなるをも堀に浸し此寺掛けに見えたり

高津 なを八町つゝ

風土記ニ天雅彦天降れ時天探女般石船に乗りてこゝに至りし所を高津といふ 万葉集 角麻呂の歌
久かたの天のさくめか岩船のはてし高津はあせにけるかも

三津 難波は高は都はの云ふそ とはの御津と称す

常陸帯塚 住吉郡堂村にあり
御所日尾張の出の居に前春慶加賀の人名 永平寺宗祖元和年中
なからに海の所をもとめて其文を焼きとて坂尾帯之名つく
者にも見はのそんて土を振る後いたり伝ふし尾帯と呼とも

澤上江 東成郡にあり 尾張出雲井と別同し

多田宮 河辺郡多田院にあり

多田神社五座 満仲之新光之忠義之之中に
満仲公ハ二十四代の御孫にして御清和天

毀譽人をうれはしむる大小矢を掛しめ多く連綿
もの馬を御とゞめて 御前の澄そとは考へし
天王寺四ヶ院 凡大寺には昔此四院の設あり
敬田院 衆生帰依の場 断悪修善の處 是坊舎なり
施薬院 薬艸を植て方に随て薬を製之
療病院 無縁病者を寄宿せしめて療之
悲田院 貧窮無頼の民を集めて住せしめ 衣食を給せし所
扨この外に摂州阿部野国府播磨中三千米を以て
供費用にあてしと也 今も天王寺村鵜田道頓堀天
満の各所に町名の地ありて 其のかみの余風を知るに似
たり 長吏と称して凡後世乞食の頭なり

とうり
泉州堺顕本寺 日蓮宗 北條某後に還俗して高三
氏と称し自號を定めしとて一つとて歌唱からまつ
うたひ初しとかや
○我か庵の永安寺は福井 綱紀長政卿の菩提道場
なりし今は跡かたもなく何かとなく
永安寺殿貞菴道松居士 慶長六年
牌子空しく跡もなくなりぬ
○土茯苓を山帰来といふ 今は誤て草薢
糧冷飯団等の異名の外 今清船に載来る土茯苓
の代りに萆薢の字あり 各別

○濃州ゟ渡れる竹ハ美濃国八幡社の境内ニ
異竹ありて竹の大さはかりなるもの園中にもありて
所蒙せし給ふ八月ニ竹を出して本草綱目及竹譜
なとに見ゆる竹を図にて竹軸一節
一丈余り是を人々洛東禅林寺にあり神物のことく
之を南唐の質當竹ハ一節丈に過さると竹譜にいひし
ハ此竹に非して
○神社の名居前ハ門といひてとりいといふとされし竹譜
神名の一二等ハ名居し第一の門第二の門となりと
書に見へたり延宝亀二年太政官符内外の名井
なとも有るハ門といふのしるしを見るへしとそね通の特

訓とハ鶏も酉雛 _坤頭元_ 小東門雛樓木といふありことに _捷元_
名井の字に鶏にや質朴の也し神社の衝門
と雛と名せしめ然鶏樓れなあるへしさされハ
文名井ともに坊舎なり華表と華表ハ
門のかはりに神社古今の門と同し前なる楼との
形状をとりあはせて近世に出る
○紅花 一名紅藍花
保名を色あるといふされとハ呉の保紀にてされの藍と
いふ本草国より従之し呉竹呉種のことし
本草綱目ハ呉藍ハ別也

餕 音シウ 茶同

○餕水 與茶字同見毛州老君碑元贇所書ノ額字ニ餕蒙ノ二字アツテ餕語ツイ書スト蓋薬ニ同シ元菴ノ説之

○㚢 音鳥 輭美　㚢 音塘 平声 大声之　㚢 音荒 関明　㚢 音車 上声 推明之

　是等の字語字ハ二字と為ル

○芺 與父同 元菴カ日古之文同之文元贇先問其連続之字而後答之 日不然則字義同誤人者矣 贇是ニナリ

○詩を作るに中之字計五字或ハ平或ハ仄様に見通し

同しきハ好の之或人元贇に問ふ人の詩多見ゆし

に平字を用ひ又仄字を入し如何元日より之排律

此様や凡詩ハ絶句に掌りしめて絶句の之排律楽

に用ひそして文字ありしらく仕立計此体なりと

答へしと云

○或僧中饋を書きて元贇に見せしにもし中にせん

甘海の年よりことを申て元日之記の体之書翰の法に乗て

又某の字何うよる時の事を書に某の字甚多

ありたりといへり

○東坡カ十字といふを人々饅頭のことゝ思へりそれ

非なり饅頭ハ其代にはなかりしことより蒸餅の異

名也晋書に蒸餅上不拆十字則不食とあれば

蒸餅ハ麪を醗にて作りて物内に餡あり今の長崎

唐人制して異邦山西の客阿蘭陀人等も食ふ

ことをいふト云

○八朔の風俗ハ鎌倉の御時や一條禅閤の御記に見ゆ

今柳営家綱公よりの御代より御祝ひにて後御鍬御

馬かりし元正のころ騎らせ給ふ京ハ行宮ありて顕然ハ
慈悲の梢ふ新雀遊けてきらめきれたりかりしなと
ところありの事ふハかゝるふれきこえけるにて

○羽柴 武蔵ノ東北 出宗仏寺に斉藤刑部當實墓ノ石塔あり
法名篠原院真阿弥陀佛 武蔵の永井にて墓ノ化し由此寺之後房の墟ノ

○土佐家の祖ハ絵所預五位下土佐守藤原経隆之其の子
趣前守行光其子趣前守光重其子土佐守廣周
浄正忠 相続絵所となれ見廣周ノ子刑部大輔光信
より土佐を称号とせ 永正年中ノ人 其子右近将監光茂 刑部大輔
光元迄より土佐男子なかりし其女子将監入道刑部元信
大炊助光吉 光茂ノ男光元に嫁せし後絵所預りとなりて其子孫なり

継ぎし幕府に仕ふ
今の土佐家ハ其源流泉州堺の人土佐久俊と云者の家相続廣と称して後の再興をなし

○僧画の大なるハ前田家大寺に在りし中古に名高人ハ
兆殿司人ノ目見猶の大画ハ洛東東福寺涅槃像明兆
殿司の筆にして竪三丈九尺横二丈六尺絶世の画なり
其他ハ同寺の経堂天井の竜も又兆殿司筆なりし紙絹
ニて継ぎし後狩野光頼 本姓ハ木村後に永徳 板面ニ
うつし描し竜ハ二丈余長ヶ十八丈余 永正年中の人なり

○此ハ下として上ふ書上にて文作之人ノ從の書れの像を
書くハ先の像を卑しむるに似られたるになり候
人あやしましまする

○村上天皇御宇瀧口の下級雷に負て其名有
し時藤原忠明ところ多くありけれとも埋もれしか
叶ひと見えて人々紀にのせしを今昔物語にあり
○人を殺して以て身を終るとて白に林九煙庵身を
以つの絶此方あるに称せんと行ひりしその頃は碑に
作人名目とせり服部南郭東林に家に祠を建家
ありし
○神に奉る幣と御穂と申すは田稲の初穂を收め
は久本居（ウツスナ）の神に献してこれを御穂と呼り今も今泊
及泉貨をも何かと呼ふは是に准して或みそとそ
梅も今に三代実録貞観十二年新錢を献すと見へ

年號神功進達せらし告文許鑄作之乎徳一
十文と云ハ錢をもつくりしにあらす。称なり
○享ゟ文五世なりし時参河国御油の驛前北に
にて村民掘出せしといふ銅鐸とも名所に掘出されて
石窟に納め人多くこれを詳にして見むと寄りて来り
民ハ銅鐸と號すし（銅鐸の作りた）此文曰昔三河国渥美
郡にて阿古月主此寶鐸を朝廷に献せしと云
其年三代実録に天平甚多かたる人ありて今銅
鐸なりしを是にして錢貨の製成れし阿古月主
乃ち古物をも人々に從明る元年十を乞ひて
時辞のをすなりとて人にも明りしを後に知

なからしと思ひられ仰せし女婿して三郎とり
十り左衛門の御判業り富し 仰せし御郎の
吏何りし八人それ御国にて德とつゞせて知らせ久
之以子にて主四つ前の年も此まかれさま奴訣を
好しし候もし

○今日 淡海公奉勅而撰 凡先姧後娶為妻妾雖會赦猶離之云々

父母を嫁として後に経父母又母伯叔父姑兄弟外
祖父母舅(ハカンツテツハ)従母従兄弟ましにおそて礼を嫁娶とくさ
せ人それ見るまとし八礼とれて文らるを姧とすたく
八私子姦通し後経及ひ父母にすて己に嫁娶

すゐとも其後姧通し私事発してま従ひ非慮の
験にいへとも御離別せしむと大化に夏秋公は法
律に見ゆる人殺嫁婚姻の礼のとき事を見合

○宇野六郎 赤松元範家人 り子鍛冶右九八楠正儀に父と
共せ云々といふを鋳せんとて光範に叶ひしれ八志を
以人として一刀を以って尼ヶて赤坂の陣営に至り
ここにして正儀に仕へしうらしき童なりし
り八正儀もらしておりい孫も云つに詐りもし文
此紙云うてにあられしもあくこれは懐に得て過月
日と送りし父ヶ七回忌に思ひきりて宿意をとげん
とせしに其日しし正儀童にて後すも私田和

泉守と烏帽子親として神田小次郎西寛と
名のらせけるに西寛法師帽子身の俤さへ人の
眼のまへかはらぬにおもひをかけける君は既にかう
住人を離しいかにしく思ひけん旧にひかれて若君を
思ひしはかり君の為又の為なり自殺をこなひけり
かなしとていかで刀ぬき自殺せんとせしかは
人々取とゞめてかなしみけるかはすかしやうやう
世をさりける身にても若人として甚かなしくて
髪切出家の後にも法に入ても夜を昼に
行ひ深く西寛法師とて行ひすましてありけり
ありし事書に見ゆ

儒者のいはくたゞしかはかりまことありて有けん
此ら人をとがめしも理なきにあらずや
○昭中将（致平親王の息）光少将（堀河右大臣顕光息）は、たゞひとつ若
殿上人にておはしける時一の人ご病ありて
かゝる御母の人々悲しみあへるに剃髪して又一条の
宰相とはじめさる方の人々も是につけ物侍る親
なほさりとてあまたなる深き世に法を悟
思ふさまにかひなかりけるとおもひそめ世にも一隙
て出家して法師中将は其比僧信に住僧吟
行ふなどいとしかりき、あま人を隊ながらに
遠めまへをとみて身のありさまを見ていつ
はかに経を取んとせしを思ひはべるる我身の

砌にこそそれかりにてしくもあらぬやうにへり
うち及ふ色にはてはかりしゆゑ珊ふつくしけ
行くせんとて三井寺の従となりぬ 長保三年二月十一日中将入道
三月寺出家 かく慶祚阿闍梨の室に入まうり尼中将
成信二十三左少将重家二十五とかや 一説
任々この事とさしてゐ成大納言のもとく
まみえあらそひけるよし
おもひしる人とありける其の中にいると云
そそるなれ
かく何ゆゑなりけるにや 栩鷲峴筆抄に委し
○尾南野間内海大御堂寺 大坊と称せり 中興も同

法師は東照宮母君の甥なりし慶長中
神君此寺に詣給ひ何すれそと宣ひ何ふと
詣らせ給ひし師ありけるに長田戦場の風
に思ひし給ひける世の事に鹿りけ
ともいひし地蔵りめ奉らしせしといへ
神君思ひの外に御心なりける前鹿見
前なれは小寺の法章カなとと命して寺門より
下し給ひし室に宿坊の支配の徳
秀圓法師 仰せ鏡にて あはれしとて給ふと仰く
かくしまさしてそ次世の法師 牧刀 けわ給ふの時
成就の虎御鏡鹿皮をもて御家に尊むなる

○此漢文のしれ字に就も
荻生氏ハ譯文筌蹄曰和国磯馭盧島たのこハ
文字の称ハ助語やまとりのをりのかくしれる
きれ語み等のことしをのこの唐音係ぬ国
なりしを略して係と以て漢字に用ゐれ和の
字より移じたる和とハ大宋大唐の文字の也
日本乃地名なる古跡の至常都の内大和と
書するハ皆所以に似たりて平安城と係りて
高る和と書給ハ和字の所ありとここ要あるに
磯馭盧島の名と文字のことを給ハ旧事記乃
説ありて所合の説くたる事説大宥天白玉の

漢制ありし日本の地名にありて延喜講記
弘仁記序此漢字書して今の唐音を以てと
者あるさまに似たり

家の字あへし何の字の字音すしも皆は漢乃隋唐此音奏之
今明治の字音ハ大ちえ以来随音にて是への字の音ハありと云ハ
呉音大際何年の別声何休浣
漢と唐音流とて全く之れ漢音之

和訓は百済の王仁より始まし王辰尓に定隋漢字的字
音代にと麼く呉漢新補せり 桓武天皇延暦十年
詔せよして漢音を習しむ同十七年勅漢書此音漢
呉音を用る事なりしむそすりたる字宋の及名主此字
校呉漢音を用み兼安以后呉阿入宋し明庵帰
朝此時宋元交ア道隆元庵大息佛光等此徒多り

異朝し編纂清書風と異にあらされと朝廷の文字なれ
昔此意を専らせし近世清人多く長崎より来て國を傳く
見りしむ今ハ此学者異を好き奇を衒ひ一家の門を立試我
若昔より学ぶところの字意を唐風の從流のと称し
し和訓御声の則を捨て明清の音をかりに強て通流と
呼て詞章を書とかやにて新奇の形あり

○丁酉六月北京聚教門外玉井村加茂北社境内より
井筒と掘出せし天平三年辛未三月五日此字を

享保二年にして九百八十七年
聖武帝年号
井筒ハ九くさいはて高サ一丈ある汁[illegible]の刻文古代のものなり
木ハまきの木にて

此是なり 板十六枚あり

むかしの井此壇にして清泉湧出して古き木之中を
つきぬ近ハ久しく埋れてありしを掘出して此橋杭参列
八橋の木なとも掘出し候て杭に致し此湖中に大杭
以下も掘出し候列杭を立て置樋弁ありて古代通
泉乃清水湧出て湧也湧も忘き候しとて人々
語りし又或者日云 云御封内岩瀬郡安八郎
長沼村小針村の祠ありて昔 皇太神宮数年宮居
まします旧跡と云此地岩瀬ニ清橋なと呼あり
其橋の壇地中小橋杭開しあり みにしてかくれなく年とかねて 木のくれ水ハ九日と云
是亜仁帝此御宇ハ天平の前既に七百十余年
を昔の橋杭にて朽もせて今に残るの存する難題の橋杭

かハらけ改ても猶て又数百年にゝなりぬる絶ゝにみつかれ
土中にありさ柩あり水井に埋とし古ハ久しくあるを
知りへしとなり

○後数正慶安三年庚寅五月七日薨て或下家に葬
御出棺の日を同しからハ各も

慶安三年五月八日江戸御出棺并御同
月十七日名古屋御出棺也、扨当今之入御同月
廿七日次ル應夢山定光寺に葬て
梅花ほに正七日迄以常不薨し未明に御喪を発せらる
されハ八日ハ其ね前之御棺製とそ仕奉備とそ何て
一日おそるゝ事如何きや思ひしハ後りたるへし　或云其薨給

八日にして御出棺ありしと古ゝに八日とつけからにやとそは
阿之と老人に承傳りしうちを留としてむたしいふを
きゝ書申つ

○昔ある倉院山崩て 承應五年五月廿四日 其跡御開帝の小堂に御座所
と山槐記にありしとて帝家の葬とハ是ほとりと申ける
しるさる事侍りけるそ

○正徳六年丙申六月二十二日未刻御葬送
同月同日申刻改元
御ニス南殿 改号如先規
上卿　近衛右大臣
廣幡大納言

一條大納言
滋野井中納言
油小路中納言
今出川中納言
風早宰相
甘露寺宰相
同宰相
傳奏 油小路前大納言
奉行 庭田頭中將

諸家勘文

天業 周易曰聖人以通天下之志以定天下之業
元文 周易曰黄裳元吉文在中也
大暦 晋書曰應大暦膺聖也相兼
享保 後周書曰享茲大命保有萬国
明寶 藝文類聚曰後王明辟還兼寶国

右 東原 式部權大輔菅原長義

保和 周易曰乾道變化各正性命保合大和乃利貞
元長 周易云元者善之長也
天明 孝經曰則天之明因地之利以訓天下
萬寶 文選曰萬宇大乎萬宝以之化
和德 周易曰和順於道德而理於義窮理盡性以至於命

右 高辻 文章博士菅原總長

大亨 周易曰大亨無咎而天下隨時

文長 史記之文武並用長久之術

天亀 尓雅注疏曰天亀俯地亀仰東亀前南亀卻西亀左北亀右 名従其耦

右東坊城大学頭菅原資長

明和 尚書曰百姓照明協和万邦

喜延 藝文類聚曰喜祚日延

永安 晋書曰濟育群生永安万国

右五條侍従菅原在廉

紹明 尚書曰紹天明即命

天保 毛詩曰天保定爾

延享 藝文類聚曰聖主壽延享祚之吉

右 清園 侍従菅原致長

以正徳六年改為享保元年

七月朔 関東改元之令

○或問無官大夫敦盛の書浄敎堂にて扇を新納めしと
ききまあるやと云 按察使資賢卿此女 敦盛此書 又京都
に於て安閑和尚 浄敎堂に寓居 此寺を作り剃髪して生一房
如佛尼公と称せし 新善光寺 浄敎堂 の傍に一院を建
て蓮花院と号して住ける一旦後洗滅後の皇子勝法
院の王阿上人病のときありしか所ありて尼之祠扇を
剃髪し法寶として所おせまて上人此病身と押し ハ
しめらとし 樊毒もにけあて年毎あるし 是より 此寺

浴殿をおこしたり
此浴室ハもと檀林皇后の創建なりし
王阿上人以来此寺ハ寺となりてより

○ある年辛卯年也某氏町にありし女醫針に為に死(死ヵ)りき
七頭ハ例ぬ紀悲声嬰孩の痛呼に似たり自らに頭脳
くだけ心臓剥裂(裂)けしとぞ又子舟許多枕上にあらはれて
相擾く云ける三日にして暁に死に死せしとぞ彼
女毎に下胎の業を受りて年は已しとぞ嗚呼壊胎
の悪業をもて活くしく嬰児を毒殺せし現報
をぬかれんや某郡にしかる処倍あるにや名医縁り
宗師の白牡丹（女の名なり）下胎の業を賃て業とし
終身一旦病に臥て脳痛頭腫潰爛間へけれ
大に叫んて曰数百嬰(嬰)児来て脳袋を呃甚苦痛し
思通に汝毒を以て胞胎を破りし其所之家人
聞ていふ我新古方書を焚て世俗をもて
罪を謝せよとて遂に死りける痛を悉訖せり